

国際水田・水環境ネットワーク (INWEPF) について
 International Network for Water and Ecosystem in Paddy Fields (INWEPF)

鷲野健二、○森哲治、今村太輔
 Kenji Washino, ○Tetsuharu Mori, Daisuke Imamura

1 国際水田・水環境ネットワークの概要

2003年3月、農林水産省は、国連食糧農業機関 (FAO) と共催で、第3回世界水フォーラム (京都) の一環として、世界各国の農業担当大臣が参加する「水と食と農」大臣会議を開催した。同会議では3つの挑戦「食料安全保障と貧困軽減」、「持続可能な水利用」及び「パートナーシップ」を掲げた大臣勧告が採択された。

2004年11月、これら3つのチャレンジの達成に向け、日本 (農林水産省) が中心となり、アジア・モンスーン地域を中心に水田農業を実施している国¹及び国際機関が参加する「国際水田・水環境ネットワーク (INWEPF)」を創設した。INWEPFは、水田農業に関わる政府関係者等が、知識と経験を共有し、水田農業発展のために国際的な議論を行うフォーラムである。INWEPFの活動は大きく、①技術的・政策的な講演を行う「シンポジウム」、②概ね年1回開催して活動方針等を決める「運営会議」、③各テーマに沿って作業・議論を行う「ワーキンググループ (WG)」の3つにより構成される。我が国はこれまで、世界水フォーラム等の関連国際会議での情報発信を念頭に、WGの活動を通じた成果づくりをリードしてきた。WGの戦略 (テーマ) は、その時節における国際的な課題に合致するように幾度か改編がなされている。現在の第6フェーズ戦略では、図に示すように、我が国はWG3のリーダー国として、水利用効率・水生産性の向上を考慮した政策・技術についての議論を進めている。

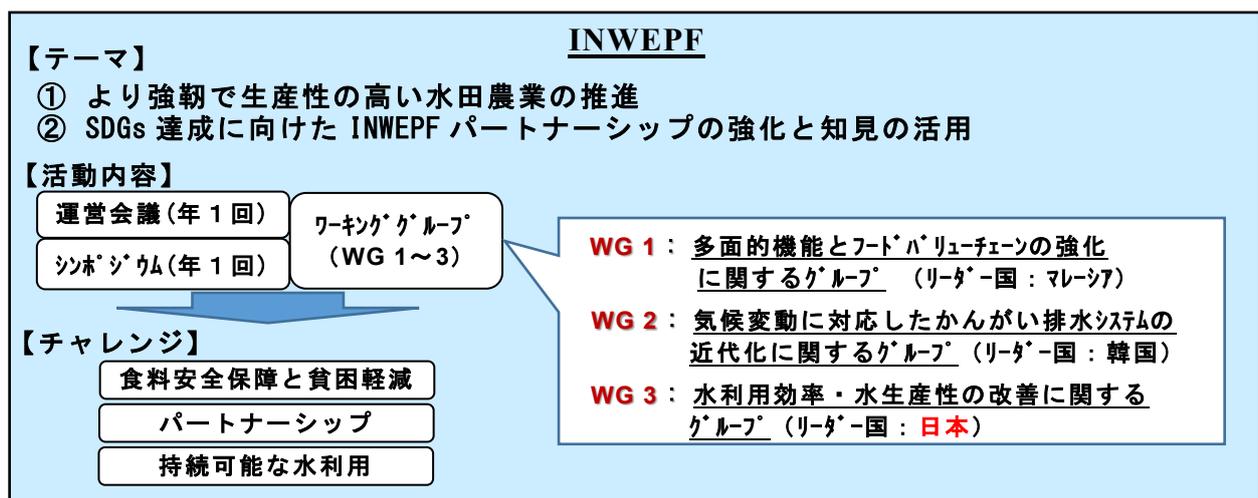


図 INWEPF 概要図

¹ 2022 年末現在、17ヶ国が INWEPF メンバー国：バングラディッシュ、カンボジア、中国、エジプト、インド、インドネシア、日本、韓国、ラオス、マレーシア、ミャンマー、ネパール、パキスタン、フィリピン、スリランカ、タイ、ベトナム

2 2022年のINWEPF活動

第18回運営会議を主催するエジプトから、COVID-19の影響により年内の開催が困難であり、2023年に延期して開催したい旨の提案があり、メンバー国より了承された。

このことを受け、日本から、メンバー国が対面で会合に参集する重要性を強調するとともに、運営会議が行われない2022年は、ワーキンググループセミナー等の会議を開催することを提案し、了承された（下記3で詳述）。

3 INWEPF・WG3（タイ・チェンマイ）の開催

2022年12月13日、タイ・チェンマイにて、INWEPF・WG3の会合が開催された。

午前中は、水利組合による水管理の開発促進をテーマとして、ASEAN統合基金(JAIF)により実施された地域ワークショップとの合同セッションを行い、11か国²とメコン河委員会(MRC)の代表者が参加した。このセッションでは、乃田東京大学准教授、松下滋賀大学教授を含む4名のプレゼンターから、SDGsの指標となっている水利用効率の算定手法における課題や、農業用水の経済価値化のための分析について講演が行われたほか、日本、ラオス等における水管理の事例紹介が行われた。

午後はWG3会合を開催し、参加したメンバー国等から、「水利用効率・水生産性の向上」に関連した各国の水管理に関する施策や施設整備に関する発表が行われ、意見交換を通じて相互の理解を深めた。



合同セッション会場



参加者集合写真 (WG3)

4 2023年のINWEPF活動

2023年8月28日、29日に第18回INWEPF運営会議(エジプト・カイロ)の開催が予定されており、各WGの活動報告や次回運営会議に向けた活動計画等について、メンバー間で相互に確認することとしている。また、2024年5月18日から24日にインドネシア・バリで開催される世界水フォーラムにおいて、INWEPFの取組や活動成果として、SDGsにおける農業の水利用効率の改善に関する発表を行う予定である。

農村振興局では、水田農業の持続的な発展に向け、引き続きINWEPFの活動をリードし、世界水フォーラム等関連会議のほか、水に関係する国際会議の動向を注視していくとともに、学識経験者のご支援を頂きながら、必要なインプットを行っていく。

² カンボジア、インドネシア、ラオス、ミャンマー、日本、フィリピン、スリランカ、タイ、ベトナム、韓国、スリランカ